

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：32630

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06611

研究課題名(和文)デーブリーンのドイツ革命と神秘思想

研究課題名(英文)The German Revolution and mysticism in Doebelin's novels

研究代表者

時田 郁子(Tokita, Yuko)

成城大学・文芸学部・専任講師

研究者番号：60757657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はアルフレート・デーブリーンの長編小説『一九一八年十一月 あるドイツ革命』で描かれる二通りの視霊体験を分析して、亡命期(1933-45)のデーブリーン的神秘思想の解明を目指した。二つの視霊体験には古代ギリシア以来続く霊魂論と中世キリスト教神秘主義の思想が底流する。デーブリーンは視霊体験を通して、生者は死者と相関関係にあり、死者に配慮する必要があるを強調する。ドイツ革命の後十年程で全体主義が台頭する背景に「霊界」への軽視を見る、デーブリーンの見識が判明した。

研究成果の概要(英文)：This study aims at finding solution for the change of Alfred Doebelin's mysticism in his exile (1933-1945) by analyzing two spiritual experiences in Doebelin's trilogy "November 1918. Eine deutsche Revolution" (1938/ 1948/ 1949/ 1950). These experiences prove that Doebelin is in the tradition of the Ancient Greek idea of the soul and the medieval Christian mysticism. He places a special emphasis on the importance of mourning for the dead, because the living are at all time correlate to the dead without knowing it. Historically the totalitarianism follows the german revolution only after ten years. According to Doebelin's recognition such a political tendency may have its root in disregard of the living for the dead.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ革命 神秘思想 歴史

### 1. 研究開始当初の背景

十九・二十世紀転換期のドイツ語圏では、マッハの要素還元主義やニーチェの超人思想が熱狂的に受容され、慣習から解放されて新たな価値観を作ろうとする気運が高まった。人間が精神と身体から成り、精神が身体の上位に存するというヨーロッパ伝統の人間観を覆す動きが現れ、性の領域を明るみに出すフロイトの精神分析や、家父長制の対極にあるバウハーフの母権論が受容され、生活改善運動(モダンダンスの誕生、青年運動の隆盛、芸術家コロニーの創設等)が各地で展開した。文学・哲学領域では、ホーフマンスタールの『手紙』(1902)を皮切りにして、マウトナー、クラウス、ベンヤミン、ヴィトゲンシュタイン等による言語批判、表現主義やダダイズムによる言語実験が行われた。

これらの文化の担い手たちは大都市在住の知識人であり、ユダヤ出自の者が多く、大学やカフェで、あるいは雑誌を通して、思想を共有する。私は、彼らがカバラや神秘主義、新プラトン主義に寄せた関心を神秘思想と呼び、神秘思想が合理主義に基づいて発展した近代社会の慣習からの解放を目指す動きの拠り所になったと考えた。神秘思想は自然現象や超自然的現象を理解しようとする人間の知的営為の成果であり、学問の専門化と共に自然科学と錬金術、哲学と神秘主義などと区分され、前者が正統な学問になると、後者は秘教と化した。たとえば、カントの『視霊者の夢』(1766)は、スウェーデンボリの神秘体験の正当性を検証するものであり、カント研究史において看過されるが、カントが批判哲学を展開する基盤になる。ドイツ文学研究では、ゲーテの神秘主義が文献学的に根拠付けられ、ロマン派のノヴァーリスを軸に1800年前後の思想図が描き直されており、神秘思想を見直す総合的研究が始まっている。

これまで私は、ローベルト・ムージル(1880-1942)とアルフレート・デーブリン(1878-1957)の文学を主たる研究対象にして、言語批判や言語実験といった同時代の風潮に照らして、両作家に独特の言語表現に着目し、「新しい人間(der neue Mensch)」というモチーフを軸に二人の世界像を探った。そして彼らの世界観に神秘思想が底流することは、二十世紀前半のドイツ語圏の文化に敷衍することができるように考えるに至った。

### 2. 研究の目的

第一次世界大戦前後のドイツ語圏では、技術産業の急激な発展と形骸化したキリスト教道徳への反発から神秘主義や新プラトン主義への関心が高まった。アルフレート・デーブリンもこれら神秘思想に傾倒し、自らの思索を「自然哲学」と呼び、三

部作『一九一八年十一月』(1939-1950)で、自然哲学の担い手たちがドイツ革命の挫折と共に倒れる姿を描いた。本研究は、デーブリンがドイツ革命を自然哲学と現実世界が交錯する場に設定したと考え、自然哲学の展開と限界を解明する。神秘思想は、ドイツ近代の前衛的文化に底流し、各分野でその影響が指摘されるが、全体主義の台頭と共に自然消滅したとの暗黙の了解がある。本研究は、全体主義の時代にデーブリンが過去を振り返りドイツ革命の時期に神秘思想の衰退を見た理由を考察し、彼の神秘思想の解明を目指す。これにより、二十世紀前半のドイツ語圏の思潮を新たな角度から読み解くことができる。

### 3. 研究の方法

本研究の対象となる『一九一八年十一月、あるドイツ革命』は、第一部『一九一八年の市民と兵士たち』(総403頁)、第二部第一巻『裏切られた民衆』(総479頁)、第二部第二巻『前線の帰還』(総563頁)、第三部『カールとローザ』(総763頁)から成り、ドイツ革命と呼ばれる、数ヶ月に及ぶ怒濤の日々を克明に描く壮大な時代絵巻である。作品内の主要登場人物のうち、二人の視霊者に主眼を置き、自然哲学の展開と限界を見定める。一人目は、スパルタクス団の指導者ローザ・ルクセンブルク、実在した人物であり、二人目は創作上の人物で、全巻を通して登場する傷痍兵フリードリヒ・ベッカーである。彼らは作品内で面識を持たないが、それぞれ幻想の中で「霊界(Geisterreich)」からの使者たちと交流する。そこで、作品内で描かれる「霊界」の特徴を捉え、デーブリンがどのような役割を「霊界」に託したのかを考察する。

### 4. 研究成果

本研究は、デーブリンの神秘思想の解明を目指して、上述の二人の登場人物の言動を分析した。

一人目は『カールとローザ』に登場する実在の革命家ローザ・ルクセンブルクである。まず、歴史学の研究書やルクセンブルクの著書を手掛かりにして、彼女の活動と第一次世界大戦直後のドイツの政治的・経済的状況を把握した。次にデーブリンの描くローザの人物像を分析した。彼は、革命家としての彼女の活動ではなく、彼女の人文的関心や詩的傾向に着目する。彼女は長い牢獄生活の中で健康状態を悪化させており、おそらく半ばノイローゼのような状態にあったらしく、こうした事実に基づいて、デーブリンは彼女が亡くなった恋人と幻想上の交流を図っていたとする。彼女の視霊体験は、神秘的結婚というキリスト教神秘主義の伝統的なモチーフと重なり、さらに古代ギリシア以来続く霊魂論に連なる。また、歴史上ローザは仲間のカー

ル・リープクネヒトと共に惨殺される。デーブリーンは、彼らが殺害される日の午後ミルトンの『失樂園』について語り合ったとし、ドイツ革命における労働者の資本家への蜂起が、創世記に記される樂園追放、つまり人間の神への反抗と重なるとする。ここから、デーブリーンがドイツ革命の失敗を樂園追放の一種と見なし、その後全体主義へ至るドイツの情勢の始まりをこの時期に見ていたと判明する。この研究成果を「デーブリーン『一九一八年十一月』における「霊界」 ローザ・ルクセンブルクの視霊体験」という論文にまとめた。

二人目は、全巻を通じて登場する主役級の人物フリードリヒ・ベッカーである。ベッカーは第一次世界大戦中に負傷したギムナジウム教師で、戦争終結と共に、ストラスプールの病院からベルリンの自宅へ帰還し、ベルリンでの革命騒ぎに巻き込まれる。ベッカーは戦争のトラウマによるノイローゼに罹っており、最初は十四世紀にストラスプールで活躍した神秘主義者ヨハネス・タウラーと、次いで霊界からの使者と自称する幻想上の存在と対話を交わす。これらの視霊体験は、ベッカーが戦争責任について憂慮している事実と連動し、靈魂論の伝統に連なる「霊界」が視霊者の目には確かに存在することを示す。次いで、彼がかつての勤務校でソフォクレスの『アンティゴネー』について語る場面を分析した。『アンティゴネー』は一般に、国家と個人の関係を主題にするものと解釈されるが、ベッカーは生者による死者の弔いという主題を強調しており、戦争を生き延びた者が戦争中に亡くなった者を弔わなければならないと言う。その後、彼がドイツ革命蜂起の現場に参加するのは、この責任感に寄ると判明する。デーブリーンは、読者がベッカーの足取りを追うことにより、臨場感を持ってドイツ革命の日々を追体験し、さらにベッカーが認識するに至った神秘思想（靈魂論と死生観）を抵抗なく受け入れられるよう案配している。この研究成果を、「ドイツ革命と黒い光 デーブリーンの『一九一八年十一月』」という論文にまとめた。

本研究では、デーブリーンの神秘思想をドイツ革命というデーブリーン自身も経験した時代と連動させて解明するという当初の目標を達成した。そして本研究を通して、「歴史小説」の形式に関する課題が新たに増えてきた。ドイツ語では「歴史」と「物語」は共に「Geschichte」と記される。デーブリーンはドイツ革命という「歴史」を「物語」ることにより、「生起する（geschehen）」すべてが「魂」の別の現れ方であるとして、神秘思想に基づいた世界観を呈示した。ここには、ユダヤ人であったデーブリーンが亡命生活を送るなかで、ドイツにおける全体主義台頭の端緒をドイツ革命に見ており、「歴史小説」執筆を通し

て歴史を再考しようとする姿勢が見て取れる。ドイツ近代の激動の時代を生き延びたデーブリーンの思考の軌跡を追うために、今後、歴史的事実とデーブリーンによる脚色の差異を検討する必要がある。現在、本研究の副次的成果として、作品の翻訳に取り組んでおり、そのためにもデーブリーンの「歴史小説」観を探ることは必須となる。これまでの研究では、デーブリーンの思想がヨーロッパの精神史といかにつながっているかという点に着目してきたが、これから二十世紀のヨーロッパにおけるデーブリーンの思想の変遷とその意義を探っていきたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

時田 郁子: 逆さまの世界 - ローベルト・ムージルの『トンカ』、成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科編『シリーズ・ヨーロッパの文化 ヨーロッパと女性』、111 - 137 ページ、2017 年 6 月、(査読なし)

時田 郁子: ドイツ革命と黒い光 デーブリーンの『一九一八年十一月』、『ヨーロッパ文化研究』36 集、61 - 81 ページ、2017 年 3 月、(査読なし)

時田 郁子: デーブリーン『一九一八年十一月』における「霊界」 ローザ・ルクセンブルクの視霊体験』、『西日本ドイツ文学』、日本独文学会西日本支部、第 28 号、1 - 13 ページ、2016 年 11 月、(査読あり)

時田 郁子: デーブリーンとベルリン、成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科編『シリーズ・ヨーロッパの文化 ヨーロッパと都市』、119 - 148 ページ、2016 年 4 月、(査読なし)

時田 郁子: クラバートの魔法、『ヨーロッパ文化研究』35 集、27 - 59 ページ、2016 年 3 月、(査読なし)

時田 郁子: デーブリーンの大地の歌『ハムレットあるいは長き夜が終わる』における「新しい人生」、『成城文藝』232 号、31 - 46 ページ、2015 年 9 月、(査読あり)

〔学会発表〕(計 1 件)

時田 郁子: ドイツ・モデルネのワニ娘 - アルフレート・デーブリーンの短編『クロコダイル』におけるエンブレムの展開、日本エンブレム研究会、成城大学、2016 年 9 月

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

書評

時田 郁子：アルフレート・デーブリーン著  
『たんぼぼ殺し』（桑田文・山本浩司訳）河  
出書房新社、図書新聞 3258 号、5 面、2016  
年 6 月 11 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

時田 郁子（Tokita, Yuko）  
成城大学・文芸学部・専任講師  
研究者番号：60757657

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし